

2013年度 関西学院初等部 学校評価を終えて

関西学院では、2008年度に初等部・中学部・高等部が共同し、一貫性と整合性のとれた学校評価制度を構築し、互いに連携をとり学校評価の実施と結果の公表に取り組んできました。

2013年度の学校関係者評価は、2012年度と同様、学校関係者評価の性格も併せ持つ第三者評価として組み込みました。2013年度初等部は、「キリスト教主義教育」「教育課程・学習指導」「生徒指導」「研修(資質向上の取組)」の4項目に重点を絞り、評価項目として設定しました。

評価の実施にあたっては、各項目について児童・保護者・教員にアンケートを行い、それぞれの立場からの意見を聞くことにより客観性を確保するとともに、多様な考えも重視しました。

今年度も各項目についてまず現状を説明し、アンケートの集計結果も参考にしながら評価・分析を加え、今後の改善の具体的方策を示し、自己点検・評価としました。

さらに、それらについて教育学部の2名の教授、聖和幼稚園長、中学部長と接続する学園の先生方の専門的な視点からのご意見を第三者評価/学校関係者評価とし、合わせて初等部の学校評価としてまとめました。

本日、関西学院評価推進委員会(2014年3月28日)において初等部の学校評価が協議、承認されました。

関西学院初等部は、学校評価を教職員一人ひとりが真正面から真摯にとらえ、自らの課題を探り、組織としてその課題に向かって努力しさらなる改革を図ります。

より質高き初等部の教育活動が、多くの人々から支持・信託を得るためにも、初等部に集う人々の“Mastery for Service”の精神を基にした正直さ、真面目さ、誠実さ、そして善良さが認められるステージをめざしてまいります。

2013年度初等部の学校評価を項目別に次頁以降に記し、ホームページ上で公表することにより社会的信頼を高めます。

2014年3月28日

関西学院初等部
校長 福田靖弘

学校評価シート

【キリスト教主義教育】

現状の説明

関西学院初等部の土台となっているのは、言うまでもなく建学の精神である「キリスト教主義による全人教育」である。この建学の精神を、どのように初等部の教育の中で具体化していくのかが私たちの課題である。

初等部では全校児童・教職員とともに毎朝守る全校礼拝を何よりも大切にし、その充実を力を注いでいる。聖書を通して語られる神の言葉に耳を傾け、讃美歌を歌い、ともに祈ることを通して、関西学院が125年間、大切にしてきた建学の精神を心に刻み続けている。

礼拝では、校長、宗教主事、そして教職員全員が児童にメッセージを語る。様々な視点からメッセージが語られるが、それぞれがスクールモットー「Mastery for Service」（社会と人のために自らを鍛える）、そして聖書の言葉につながるメッセージを児童に語る工夫をしている。

また教職員だけでなく毎週木曜日には3年生以上の児童が司会、お話、お祈りを担当する児童礼拝を守り、日々の学校生活や家庭生活の中で経験し感じた事柄から、他の児童たちに伝えたいことを「Mastery for Service」や聖書の視点を通して語っている。その他、児童は週1時間の聖書科の授業、各宗教行事、宿泊行事などを通して、キリスト教の精神と価値観に触れ、「Mastery for Service」の意味や、人としてどう生きるべきかについて学ぶ機会をもっている。

教職員に対しては、キリスト教や学院のキリスト教主義教育についての研修会を実施し、全教職員がキリスト教主義教育の担い手であることを確認できる機会をもっている。また新規採用の教職員に対しても、オリエンテーションの中で、同様の研修会を実施している。

保護者に対しては全学年の保護者対象の聖書講座（年間3回）に加え、PTA活動の一環として各学年ごとに聖書に親しむ会が実施されている。これらを通して、関西学院のキリスト教主義教育について、また聖書が伝えようとしているメッセージをともに学ぶ機会をもっている。さらに新入生の保護者に対しても、入学前の2回のオリエンテーション、入学後のオリエンテーションで、初等部のキリスト教主義教育についても講話を行い、キリスト教主義教育の理念を共有する機会をもっている。

評価・分析（アンケート結果を含む）

今回の学校評価のアンケートにおいて、児童に対する「こころの時間や聖書の勉強は大切なことだと思いますか」との質問に対する肯定的な回答は94%と昨年より約10ポイント増加した。児童へのアンケートは3年生以上の360名を対象に実施しているが、3生、4年生の肯定的な回答の割合が昨年の97%から98%とほぼ変わらないのに対して、5年生、6年生の肯定的な回答の割合が72%から91%と増加している。

学年が上がるにつれて、肯定的な回答の割合が減少する傾向は変わっていない

いが、昨年との比較で考えるとその割合はかなり改善していることが分かった。またアンケートの問いかけに対して、「強くそう思う」と答えた児童の割合が昨年度の44%から59%に上がっていることから、キリスト教主義教育が児童の中に浸透してきていることが分かる。しかしながら、数値としては減少したとはいえ、約5%の児童が否定的な回答をしていることを、重く受け止めなければならない。少しでもこの数値が減少するような方策を考え実行していかなければならない。

保護者へのアンケート項目「学校は、キリスト教主義教育の理念について、保護者と共有する機会を設けているか」との質問に対しては、肯定的な回答が昨年度と同様、92%であった。全学年の保護者を対象としている「聖書講座」に加えて、PTAと協力して開催している「聖書に親しむ会」が定着してきた結果だと考えられる。聖書講座には毎回約200名、「聖書に親しむ会」には各学年とも約50名が出席してくださっている。また「学校は、キリスト教主義に基づき、人を思いやる気持ちや態度を育てている」との質問に対しても、肯定的な回答の割合が年々増加している。今年度は昨年度の81%から87%に増加しており、多くの保護者の方々がキリスト教主義教育の良さを実感して下さっていることが分かる。しかし一方で、そのように実感しておられない保護者の方々が13%いるということも忘れてはならず、キリスト教主義教育の理念を初等部の教育活動の中で、さらに具体的に生かしていく工夫が必要である。

教員へのアンケート項目「私は、礼拝や研修を通してキリスト教教育の理念を共有している。」との質問に対しては、今年度93%が肯定的な回答をしており、また「学校はキリスト教主義教育を学校生活の中で具体化している」との質問に対しても同様に93%が肯定的な回答をしている。特に後者の問いかけに対する回答の中で、「強くそう思う」と回答した教職員が28%から今年度は50%に増加しており、自分がキリスト教主義教育の担い手であるという自覚を強くもって、子どもたちの教育にあたらうとする意志の表れを読み取ることができる。今後も日々の礼拝や研修を通して、キリスト教主義教育の理念を共有し、教職員全員が肯定的な回答をするような学校づくりを目指していきたい。

改善の具体的方策

関西学院初等部の児童・保護者・教職員が、キリスト教主義教育の理念を共有し、聖書の価値観を学ぶことを通して、スクールモットー「Mastery for Service」を体現できる人材を育てていくことが私たちの学校の使命である。その実現のためには、日々の小さな積み重ねが何よりも大切である。朝の全校礼拝が児童にとって喜びや希望を感じられるような時間でなければならないし、教職員こそが礼拝を関西学院初等部の教育の土台であるという意識を強くもてるような研修や取り組みを続けていく。

児童に対しては、発達段階に応じた聖書科の授業や宗教プログラムの企画・実施、そして何よりも児童の生活の中に「Mastery for Service」を実現していくための努力と工夫をしていく。

保護者の理解や協力、連携が不可欠であるのは言うまでもない。学校が何を大切にし、何を児童に伝えようとしているのかを、聖書講座や聖書に親しむ会

はもちろん、児童とともに礼拝に参加できる機会を積極的につくることや、学校だよりや学級だより、学年だよりなどの文書によっても繰り返し保護者に伝えていきたい。

第三者評価／学校関係者評価

- 評価シートからは、関西学院初等部の土台となっている、建学の精神である「キリスト教主義による全人教育」の具体化・実現のために、児童・教職員・保護者などに対する日常的かつ周到な配慮を伴った活動が継続されていることが素直に感じられ、高く評価できる。また、さまざまな価値観や考え方が存在する中、児童や保護者のアンケート結果の肯定的回答の増加や高い率の維持等が見られることも、日常の活動の積み重ねを想起させる。今後、アンケートの否定的な回答に対する真摯な受けとめを忘れずに、児童の生活の中に「Mastery for Service」を実現するよう、さらなる努力と工夫がなされることを期待したい。
- キリスト教主義教育が児童や保護者の中に浸透してきていることは非常に評価できる。聖書の価値観を児童のことばで理解させていくことはとても大事なことである。ただ、ことばの世界だけにとどめることなく、具体的な態度や行動にどう生きて働いているかきちんと評価していく必要があると思う。児童の発達段階を十分考慮して、より体験的な活動を取り入れ、児童一人ひとりの具体的な生活の場や実践に生かせる指導を工夫して欲しい。
- 多くの保護者の方々がキリスト教主義教育の良さを実感しておられることが、81%から 87%の増加というポイントで示されているのは素晴らしいと思う。児童の毎日の礼拝に取り組む姿は誰が見ても感動を覚える。礼拝での姿勢は、そのまま児童の落ち着いた気品ある行動に結びついているのは間違いないだろう。このまま揺るぎなく、学校としても自信をもって、キリスト教活動を実践してゆかれれば、ますます素晴らしい学校になると思う。キリスト教的行事は、初等部の児童の成長に、なくてはならない大事な存在であろう。
- 現状の説明、評価・分析の項目を読むと「キリスト教主義教育」の目標の重点が日ごとの礼拝、聖書の学びに置かれているように思われる。しかし、学校訪問の際に、多くの教諭が大事にされていたことは、礼拝や聖書だけでなく、キリスト教主義の教育として児童一人ひとりにまなざしを向け、向き合い、共感しながら「神の愛」を体現できることに努めていたことである。今後、さらに全教諭において、「キリスト教主義教育」の理念・共通理解を深められることが肝要であろう。

2013 年度学校評価

学校評価シート

【教育課程・学習指導】

現状の説明

教育理念「キリスト教主義に基づく全人教育による人格形成」を念頭に置き、「児童の学力・体力の的確な把握」「各教科の特性に応じた授業への工夫と児童の興味・関心に応じた授業の展開」及び「芸術文化活動」について計画的、具体的に取り組みを行ってきた。その中でも今年度、初等部の特色的な教育とする「KGタイム」をより有効なものとするために、3年生以上の学年においては、45分を1単位時間とした「風の時間(聴読・表現力)」、「力の時間(推論・分析力)」、「光の時間(英語・国際理解力)」として実施した。また、それらのシラバスについては概論を示した。

児童の学力については、各学年に合わせた評価規準を設け、絶対評価として把握し、通知書として保護者に伝えた。そして、より保護者に伝わる通知書のあり方を検討するために「通知書検討委員会」を設置し、議論を始めている。また、児童の学校生活全般の実態を把握するために「hyper-QU」を実施し、個々の「友達関係」や「学習への取り組み方」の実態把握を行い、児童が「居心地のいい」円滑な学級経営ができるよう努めた。通知書やQUについては個人懇談会、家庭訪問、学級懇談会等を通して、できる限り家庭と共有し、連携を図った。

主な、学校行事である体育祭、文化祭、作品展については、教科部会や実行委員会を組織し、内容や運営方法について話し合い、実施した。

評価・分析 (アンケート結果を含む)

「授業展開」については、「学校は、基礎学力が定着する授業を行っている」の項目で74.1%の肯定的な回答を得ている。しかし、「学校は、基礎的な学習だけでなく、発展的な学習も取り入れながら授業を行っている」の項目で55.6%と前年度からさらに12.8ポイント肯定的意見を下げている。初等部の「発展的な学習」は「KGタイム」に象徴されてきたと考えてよいが、今年度「KGタイム」の内容を変えたことによることの影響が考えられる。

また、「魅力的な授業づくりのための工夫」については、「学校は、楽しく分かりやすい授業をするために工夫をしている」の項目で、74.6%、児童アンケートの「授業はわかりやすいですか」の項目で、93.3%の肯定的回答が得られている。教員各々の授業づくりについての研鑽が評価されていると考えられる。

「評価基準に基づき、的確に児童の学力を把握する」については、「学校は子どもの学力を把握している」の項目で77.2%の保護者が肯定的回答をしている。教員アンケートでの「児童の客観的な学力把握に努めている」の項目でも100%が肯定的回答をしている。しかし、「学校は子どもの学力を保護者にきちんと伝えている」の項目で75.2%の肯定的評価にとどまっている。子どもの学力把握はできているが、保護者に伝わりきっていない。また、「児童の運動能力の把握、体力・運動能力の向上」については、「学校は、子どもの体力

を把握している」の項目で、80.3%の肯定的回答を得た。

「芸術文化活動」については、「学校は、音楽、美術（図工）を中心とした芸術教育を通して、子どもの豊かな感性を育成している」の項目で、86%の肯定的回答を得ている。文化祭、作品展での子どもの取り組み方や発表が評価されている。

改善の具体的方策

全体として、児童及び教員の教育課程における肯定的回答は微であるがポイントを上げている。しかし、保護者の肯定的回答はこれも微であるがポイントを下げている。これについては、やはり保護者に対しての説明が不十分であると考えられる。教育課程についての内容や、特に今年度形を変えた「KGタイム」については、教育講座や学級懇談会などを通じて、今一度そのねらいと内容について説明をする必要がある。

初等部の教育の特色として掲げている「KGタイム」については、その内容のさらなる充実が必要である。それを行うことが、特に今回肯定的評価が最も低かった「発展的学習の展開」の充実につながるものと考えている。

評価については、「通知書検討委員会」を継続させ、より分かりやすい通知書のあり方を探る。また、外部テストを取り入れ、相対的な学力を把握する。

第三者評価／学校関係者評価

○昨年・一昨年の学校評価を踏まえてみると、教育課程における初等部の改善への努力は認められる。今後のより充実した教育課程の策定と実施のためには今一步踏み込んだ現状把握と分析、改善のための具体的取り組み、そしてこれまで以上に保護者・児童と連携していく姿勢が求められよう。「改善の具体的方策」には、例えば、評価に関して昨年指摘した通知書を基にした「子どもや保護者との対話的評価」やそれに代わるより有効な方法を工夫し実施したか、改善のポイントは何か、そうした具体に対する言及が必要であろう。また、学力通知に対する保護者の肯定的回答が低下したことの原因として説明不足があげられているが、教員側からの一方通行的な説明だけでは得心しない保護者の思いがあるよう思われる。改善の具体的方策として挙げられている「通知書検討委員会」の継続で検討すべきは書式・掲載事項等の通知書のわかりやすさだけでなく、それをどのように活用、次に生かすかということも忘れてはならないであろう。

○アンケートは単なる数値の処理ではなく、その質やその裏に込められた思い等の具体的検討や把握も必要なのではないだろうか。例えば保護者の発展的な学習を取り入れた授業に対する肯定的意見が低下していることには、初等部教育の特色としてあげられている「KGタイム」に託す初等部の思いと保護者の期待する発展的学習の内容にずれがあるのではないだろうか。初等部の考える内容の妥当性等の再吟味、保護者との相互交流を基盤とする丁寧な説明など、これまで以上の綿密で丁寧な改善の営みが求められているように思う。

○「発展的な学習」とは、児童自ら課題を持ち、考え、意欲的に深く追究していく学習を指すと考える。このような学習を展開するには、授業方法を教師

集団で検討し、工夫していくしかないと思う。安易に答えを教える授業でなく、ゆさぶりをかけ、児童一人ひとりに考えさせ、一人ひとりの思考過程を大切にし、的確に評価していくことが大事であると考えている。いろいろと工夫をされていると思うが、さらに努力をしていただきたい。

- 初等部の授業を幾度となく見学させていただき、先生方が生徒一人ひとりの発言や提出物の扱いを大事にしておられ、学年団で十分に準備、打ち合わせがなされた授業展開に気を配っておられることに感心している。児童アンケートの「授業はわかりやすいですか」の項目での 93.3%の肯定的回答は、十分に高く評価して良いと思う。また、体育大会や文化祭での、小学生としては非常にレベルの高い発表にも、頭が下がる。毎日の地道な教育活動を、これからも継続してほしいと思う。
- 各教科・各分野にわたって児童の学力が向上するように、学校側は、授業内容・学習内容の工夫をしていることは実地においても十分に把握できた。評価シートの記述には、目に見える評価の基準が列挙されているが、目に見えない児童自身のやる気・好奇心・向学心に着目されると、より関西学院が大事にしているキリスト教主義に基づく全人教育の意味が出てくると思われる。

2013 年度学校評価

学校評価シート

【生徒指導】

現状の説明

初等部の児童には、『関西学院の一員』としてだけではなく『社会の一員』であることを自覚し、行動できるように日々指導を続けてきている。特に登下校に際しては、教員のみならず、警備員、PTA、同窓会宝塚支部が組織するスカイレンジャーズの支援を受け、児童の安全確保および安全指導にあたっている。

学校生活では児童の安全委員会を中心にした挨拶運動、廊下や階段の歩行指導、遊び方指導、時刻・時間の遵守励行など、児童が学校生活を安全に送ることができるように指導を行ってきた。また、必要に応じて、こころの時間内に学事主任から学校生活での良い行動や課題などを具体的に伝える機会をもってきた。

教職員研修として宝塚消防署から講師を招聘し、救急救命実技研修・AED操作研修を実施したり、学期ごとの地区別集団下校では児童とともに列車に乗って車内マナーを指導したり、危険箇所の確認や通学路の現状視察を行ったりしてきている。

保護者には、PTA登下校サポート連絡票での意見や感想、初等部に寄せられた一般の方からの苦情などをもとにしたプリントを配布し、登下校の様子と今後の留意点などを知らせ、意識向上と啓発を行っている。

登下校に関しては、昨年度よりも苦情はかなり減ってきている。しかし、届けられるクレームからは車内でのマナーについての指導を継続する必要があるだけでなく、一部の児童については安全に関して意識が低く、ホーム上を走ったり、電車に近付きすぎたりといった危険な行動をとる事象も見られている。そのような場合には、保護者来校の上、担任や学事主任、副校長による指導を行い、保護者同伴での登下校を指示し、安全に関する意識の向上と安全の確保を進めている。

生活指導上の事象については、連絡を密に進めるとともに、担任、学年主任、学事主任、管理職といった対応段階を明確にし、できるだけ素早い、的確な対応ができるように進めてきている。

しかし、校内での日々の様々な事象に対する教員の意識や指導に際する姿勢、保護者への対応や啓発に差異がみられるのが現状であるので、学年主任を中心に各学年で共通理解すべき内容について連絡を取り合い、児童の発達段階に応じて指導の統一性を高めていくようにしてきている。

評価・分析（アンケート結果を含む）

学校生活上の規則の指導に関して、保護者アンケート「学校は、しっかりと挨拶ができるように指導している。」では79%、児童アンケート「だれにでも元気よくあいさつをしていますか。」では94%の肯定的な回答を得ている。今年度、「あいさつは生活の基本」と掲げ、あいさつ週間という

行事を設定して啓発を進めてきただけでなく、日々の機会を活かして全教員が取り組んできた成果であり、特に、校内や登下校中の挨拶については頻度ならび態度に向上が見られると感じている。

児童アンケート「学校のきまりを守って生活していますか。」では、87.8%が肯定的な回答をしており、児童がよりよい学校生活を過ごそうと自己の行動に目を向け、実践しようとしている姿を見ることができる。朝の礼拝後に全児童に指導を行ったり、各クラスでは帰りの会で一日を振り返り、良いことは良い、改善すべきところは改善する、と児童が今後につなげられるような機会を持ってきたりした成果である。しかし、保護者アンケート「学校は、集団生活に関するルールやマナーについて適切な指導をしている。」では、肯定的な回答は77.5%にとどまった。学校は保護者に対し、懇談会や教育講座などの機会を活かして、より明確な指導指針や指導の姿勢を示していく必要があるとわかる。

開校以来、児童の登下校に対しての苦情は無くなってはいないものの、件数は激減している。各駅から学校までの歩行通学路での苦情が少なくなったのは、地域の方々に初等部の存在が認知されてきたこと、警備員の積極的かつ熱心な指導、PTAの登下校サポートの充実などが挙げられる。車内での態度に関する苦情が減っている理由としては、高学年に自覚と責任感が持てるように指導を進めてきたこと、登下校経路に基づいた地区会の活動を活性化させ相互の意識を高めてきたこと、苦情の原因となった児童や行動に対しては徹底して指導し、再発しないようにしてきたことなどが挙げられる。

挨拶、登下校マナーなど生活指導について、全般的には良化しているがゆえに、個人差が顕著になっている。特に、登下校マナーについては、わずかな数の児童がきちんとマナーが守れていないだけで、苦情をもらうことになったり、学校全体を象徴する事象と捉えられたりすることになる。今後は全体的な指導を継続するとともに、より個別の指導を徹底する必要があると感じている。

改善の具体的方策

挨拶に関する指導は、すべての児童が自ら進んで挨拶できることを目指していく。また、時、場面など状況に応じてより適切な挨拶を選んで行えるよう、質の向上を意識し、指導をしていくこととする。人間関係をより良好なものにできる挨拶を身につけられるよう、全教員が挨拶を実践することで児童を導いていきたい。

生活指導に関する課題は、教員の指導意識の共有、保護者の理解と協力、児童の意識向上と意欲など、三者それぞれの力をあわせて取り組む必要がある。そのために、児童の良い行動には賞賛を、課題が見られる児童へは適切な指導を行う。また、保護者へは学校の大切にしている重点や指導の方向性、考え方について教育講座や聖書講座などの機会を活かして啓発を進める。その上で、個別の事象に対しては真摯な態度で臨み、学校とともに児童にとって必要な指導がより適切に進められるよう、連絡を密に取り組むようにする。教員によって指導の差異が出ないように、朝礼や教師会で学校として取り組んでいる事象、学事委員会からの提案について丁寧に伝えて、全教員が同じレベルで指導できるようにしていく。また、学事委員会が指導が必要な場面に

同席し、学校としての指導方針が貫けるようにしていく。

第三者評価／学校関係者評価

- 登下校時を含む生活に関する現状及びそれに対する初等部の評価・分析は、評価シートからは基本的に昨年とほぼ同様であると受け取れる。そうした中で本年度は生活指導の要として「あいさつ」を重点的に取り上げ、その成果が見られていることは評価できる。また、改善の具体的な方策として教員・保護者・児童の三者の力を合わせた取り組みをめざすことが述べられていることなども評価できる。今後指導を進めるにあたって、初等部では既に十分に理解されていると思われるが、次のような点はとくに留意していくことが必要であろう。
 1. 全体の指導が行き届いてくると個人差が顕著になり、少数の個人の問題として処理してしまう恐れがあるが、そうならないようにすること。
 2. 既に述べられていることであるが、「教員によって指導の差異が出ない」ようにすること
- なぜ、挨拶や登下校マナーなどが大事なことなのか。これら生徒指導に関する課題は、特別活動の学級会活動や道徳教育、人権教育の中で、さまざまな教材を使い、何度も話し合い考えさせる中でしか、児童に意識化はできないと思う。いろいろと大変と思うが、児童の心に寄り添い、児童を励まし、認めながら取り組んでいただきたい。
- 初等部の児童たちの登校路で、通学の様子を見させていただいているが、丁寧に挨拶をする子が多い。また、初等部内でも、廊下で出会うと、立ち止まって挨拶をする児童が目立つ。本当に頭が下がる。登校路で毎日ご指導くださる警備員さんや保護者の方、OBや地域の方のご指導が、今では欠かすことのできないものになっていると思う。初等部で実践しておられることが、ごく当たり前のようになり、さりげなく保護者に伝わると良いと思う。
- 改善の具体的な方策に「児童の良い行動には賞賛を、・・・」とあるが、挨拶やマナーを守るなどの意識向上は、自らの意識が変わることによって改善されていくものと思われる。道徳心は、教え込むことや規則を厳しくすること、賞罰で本質的な向上は求められない。まずは、現在、心掛けておられる全教職員意識向上の姿勢（児童の目指したくなる大人像）と「なぜ挨拶が大事なのか」「なぜマナーを守るべきなのか」を児童とともに考えることが必要であろう。

2013 年度学校評価

学校評価シート(重点的な課題)

【研修】

重点的に改善に取り組んだ課題

教師力の向上と初等部での Mastery for Service の実践

具体的な取り組み内容

- ・公開授業、および研究授業の実施…教科を中心とした研修グループを形成した。事前検討会、研究授業、事後研究会を伴う研修授業を行ってきた。年間に6回の研究授業(大授業)は全教員が参加した。また、全教員ではなく教科部会の教員が参加する小授業を含めて、全員が研究授業を実施した。
- ・校内研修計画の確立…キリスト教研修、救急救命法の研修、児童理解研修会といった実践的な研修の機会を計画的に多く持てるようにした。
- ・初任者研修計画に基づく教師力の育成…指導担当者を設定し、教員としての日常業務から授業力向上に至るまで、指導を行ってきた。また、研修委員会が主催する初任者・若手教員の授業力向上を目的としたフレッシュ研究授業を実施。板書、発問、授業構成など、基礎基本的なことから技術向上を目的としてきた。

取り組み内容に関する評価・分析

- ・教員対象アンケート「授業研究を積み、質の高い魅力的な授業を展開できるように努めている」に対する肯定的な回答の割合が96.3% (昨年度78.3%)であった。年間に6回、全員参加の研修授業(大授業)を持った。また、全教員ではなく教科部会の教員が参加する小授業を含めて、全教員1回以上の公開授業を行った。授業を公開し、他の教員の感想・意見をもらう機会が増え、自らの授業研究を深める機会を多く設定できたことがプラスに働いたと言える。
- ・教員対象アンケートでの質問「研修部の教員研修計画に基づき、授業研究や公開授業を実施している」に対する肯定的な回答の割合が96.2% (昨年度95.8%)であった。キリスト教研修、救急救命法の研修、児童理解研修会といった校内研修会だけでなく、兵庫県私立小学校連合会や西日本私立小学校連合会の研修会にも全員出席を基本として参加してきた。また、開催二回目の学校公開会では全教員が授業公開をすることに向けて、研修紀要や当日の指導案集を編むために、研修委員会の研修計画に基づいて取り組むことができている。
- ・児童対象アンケートでの質問「授業はわかりやすいですか」に対する肯定的な回答の割合が93.3% (昨年度87.5%)であった。今年度は、初任者研修の内容を授業研究に重きにおいたものにしたたり、教員間での教材研究や授業研究について交流が日々行われたりしていることがポイントのアップにつながっていると考えられる。
- ・保護者対象アンケートでの質問「学校は、楽しく分かりやすい授業にするために工夫をしている」に対する肯定的な回答の割合が74.6% (昨年度76.5%)であった。教員や児童の評価に比べて保護者の評価が低く、また、昨年

度のポイントを下回っている。保護者は授業参観の様子を見たり、児童からの授業の様子を聞いたり、単元テストの結果を確認したりして、アンケートに答えている。4分の1の保護者から「現状では不十分」という回答を得たことは、課題として重く受け止めなければならない。

促進させる方策、改善に向けた方策

- ・教員対象アンケート「授業研究を積み、質の高い魅力的な授業を展開できるように努めている」や「研修部の教員研修計画に基づき、授業研究や公開授業を実施している」に対する肯定的な回答の割合がどちらも96%を超えた高いポイントとなっている。特に前者は18ポイントアップした。授業研究に重きを置いた校内研修計画への取り組みの成果だと捉える。一方で、これらの取り組みが「子どもの学力向上に繋がっているか」という実態についても検証し、校内研修体制の推進に取り組んでいく必要がある。
- ・児童対象アンケートでの質問「授業はわかりやすいですか」に対する肯定的な回答の割合が93.3%と、昨年度より5.8ポイントアップした。90%を超える高い割合であると言えるが、限りなく100%に近づく授業づくりに向けて、教員は研修を深めていく必要がある。クラス全員の児童が「楽しくできた・わかった」という実感が得られるような授業研究についての取り組みも推進していきたい。
- ・保護者対象アンケートでの質問「学校は、楽しく分かりやすい授業にするために工夫をしている」については、4分の1の保護者から「現状では不十分」という回答を得たことについては重く受け止める。まず、どの子にもわかりやすい指導技術の向上が必要である。指導法や教具、教材の工夫などについて研修の機会を校内研修として進めていく。特に2013年度は設定数が少なかったと振り返る。個別の校外研修については次年度以降も継続的に参加していく。一方で、授業での児童の姿を保護者へさらなる情報開示していく必要もあると考えられる。児童の学習に対する取り組みや達成感、学力の獲得はペーパーテストで計り切ることが難しいものもある。関心意欲態度や思考力などがこれにあたる。それらの学力の重要性や児童の姿を保護者に伝えていく努力も惜しまず続けていくべきであると考えられる。

第三者評価／学校関係者評価

○課題のうち、「教師力の向上」については、「公開授業、および研究授業の実施」「校内研修計画の確立」「初任者研修計画に基づく教師力の育成」という具体的な取り組みとして、昨年までと比べてより充実した内容で計画が練られ実践が試みられてきたことが理解でき、評価できる。いわば、授業改善への枠組みが整えられたと言えよう。今後は今年度に整えられた枠組みをもとに、その定着と充実が図られることを期待したい。その際、例えば、「取り組み内容に関する評価・分析」で指摘されている保護者対象アンケートにおける「学校は、楽しく分かりやすい授業にするための工夫をしているか」という質問に対する肯定的評価の低さは、単に指導技術に対する不満足さを示しているだけではなく、授業のねらいや内容的なものに対する授業への不満をも示しているのではないかと謙虚に受けとめ、その改善策を考えてみる

ことも有意義であろう。この質問に対する肯定的解答の低さは過去2年間もほぼ同程度であったことを考えるとき、根源的な問題を検討してみることも必要だと思われるからである。なお、教員対象アンケートに見られる授業研究や研修等に対する肯定的評価の高さは、個人として、また教師集団として積極的かつ向上的に取り組んだ成果として捉えることは首肯できるが、その取り組みが学習者の学力向上につながるよう一層の努力が望まれる。課題のうち、「初等部での Mastery for Service の実践」については、昨年も同様のことを指摘したが、より明瞭にその取り組みの内容や評価が理解できるように評価シートに記載すべきであろう。それは初等部での教育の基盤であり、特色であるから。

- 研修を工夫し、深めていることは非常に評価できる。今後もこのように全教員一丸となって研究・研修に取り組まれることを期待している。「わかりやすい授業」とは、教師主体、つまり教師がわかりやすく教えていく授業のことなのか、それとも児童主体で児童が自らの力で追究していく授業をさすのか、よくわからないので整理をされた方がいいのではと思う。ちなみに、フィンランドの教育は、児童主体の教育を中心としている。教師は優れた援助者、支援者という概念である。
- 年間に6回の研究授業を全教員が参加して実施しておられることは、特筆すべきことだと思う。そうした積み重ねが、児童にとっての、わかりやすい授業実践に、確実に繋がっていると思う。教員の仕事は多岐に渡り忙しいが、少しでも時間を見つけて外部の研修に足を運ぶことが、更なる発展的な授業展開に結び付くと考える。それは、やがて保護者の理解にも通じることになるのではと思います。
- 多くの研修をされて実践力の向上に努められていること、各教諭の研鑽によって質の高い学習が実践されていることはアンケート結果にも十分に反映されている。今、この学校評価や実地を見学したことで思うことは、全教諭による「関西学院初等部のキリスト教主義教育」とは何なのかを問い直し、共通理解をもってより素晴らしいキリスト教主義教育が展開されるために、いい研修・研鑽が営まれることを望む。

2013 年度学校評価

2013年度 学校評価 実施項目一覧（初等部）

	大項目	小項目	目標	アンケート			選択肢（児童用）案
				教職員用	保護者用	児童用	
	初等部全般				1. 子どもは、学校に行くのが楽しいと感じている。 2. 初等部の教育には満足している。	1. 学校は楽しいですか。	とても楽しい／楽しい／ あまり楽しくない／楽しくない
独自	キリスト教主義教育	キリスト教主義教育の理念の共有	教職員間でキリスト教主義教育の理念を共有する。	1. 私は、礼拝や研修を通してキリスト教主義教育の理念を共有している。	3. 学校は、キリスト教主義教育の理念について、保護者と共有する機会を設けている。	2. こころの時間や聖書の勉強は大切なことだと思いますか。	とても思う／思う／あまり思わない／思わない
		キリスト教主義教育の推進	キリスト教主義教育を学校生活の中で具体化する。	2. 学校はキリスト教主義教育を学校生活の中で具体化している。	4. 学校は、キリスト教主義に基づき、人を思いやる気持ちや態度を育てている。		
ガイドライン	教育課程・学習指導	児童の学力・体力の的確な把握	評価規準に基づき、的確に児童の学力を把握する。	3. 私は、児童の客観的な学力把握に努めている。	5. 学校は、子どもの学力を把握している。	—	—
			評価規準を設定し、それに基づく的確な評価を行う。	4. 私は、評価規準により、的確な評価を行っている。	6. 学校は、子どもの学力を保護者にきちんと伝えている。	—	—
			運動能力テスト等を通して、児童の体力、運動能力を把握し、体力・運動能力の向上に資する。	5. 私は、児童の客観的な体力把握に努めている。	7. 学校は、子どもの体力を把握している。	—	—
		各教科の特性に応じた授業への工夫と児童の興味・関心に応じた授業展開	基礎的、基本的な内容の定着、および発展的学習の展開のため6年一貫シラバスを作成し充実させる。	6. 私は、シラバスによる計画的な授業を行い、児童にその内容を定着させている。	8. 学校は、基礎学力が定着する授業を行っている。 9. 学校は、基礎的な学習だけでなく、発展的な学習も取り入れながら授業を行っている。	3. 授業では、新しいことをたくさん知ることができますか。	とてもできる／できる／あまりできない／できない
			魅力的な授業づくりのための工夫。	7. 私は、授業研究を積み、質の高い魅力的な授業を展開できるよう努めている。	10. 学校は、楽しく分かりやすい授業にするために工夫をしている。	4. 授業はわかりやすいですか。 5. 授業では、自分から調べたり、考えたりすることが多いですか。	とてもわかりやすい／わかりやすい／ わかりにくい／とてもわかりにくい とても多い／多い／少ない／ない
		芸術文化活動	様々な芸術のそれぞれのよさを見出すとともに、自分の願いをこめて、音楽作品、美術作品をつくりあげる喜びを感じ取る。	8. 学校は、音楽、美術（図工）を中心とした芸術教育を通して、児童の豊かな感性を育成するよう努めている。	11. 学校は、音楽、美術（図工）を中心とした芸術教育を通して、子どもの豊かな感性を育成している。	6. 音楽や図工の授業は楽しいですか。	とても楽しい／楽しい／あまり楽しくない／楽しくない

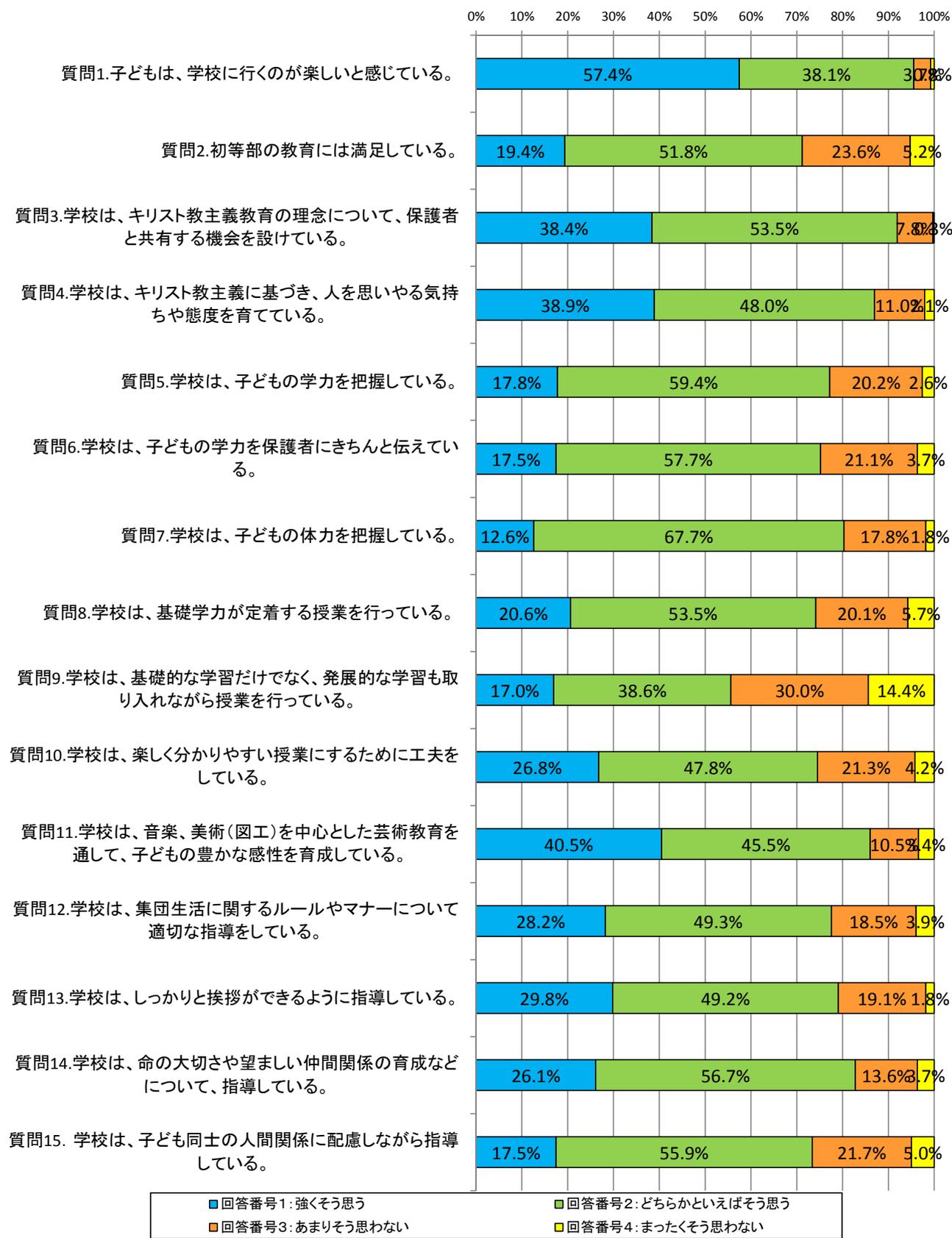
2013年度 学校評価 実施項目一覧（初等部）

	大項目	小項目	目標	アンケート			選択肢（児童用）案
				教職員用	保護者用	児童用	
ガイドライン	生徒指導	社会の一員としての意識についての指導	挨拶や時間厳守など、社会生活をする上での基本的なマナーについて指導する。	9. 私は、挨拶や時間厳守など、社会生活をする上での基本的なマナーが児童に身につくよう適切に指導している。	12. 学校は、集団生活に関するルールやマナーについて適切な指導をしている。 13. 学校は、しっかりと挨拶ができるように指導している。	7. 学校のきまりを守って生活していますか。 8. だれにでも元気よくあいさつをしていますか。	よくできている／できている／あまりできていない／できていない よくできている／できている／あまりできていない／できていない
		命の大切さや良好な人間関係などについての指導	命の大切さや良好な人間関係構築など、社会の中で生きる上で大切なことについて指導する。	10. 私は、命の大切さや良好な人間関係をつくることなどについて、学校生活の中で指導している。	14. 学校は、命の大切さや望ましい仲間関係の育成などについて、指導している。	9. 学校で、命の大切さやなかまの大切さなどについて学んでいますか。	よく学んでいる／学んでいる／あまり学んでいない／学んでいない
		豊かな人間関係づくりに向けた指導	豊かな人間関係づくりのために、適切な指導を行う。	11. 私は、児童間の人間関係を円滑にするための配慮、指導をしている。	15. 学校は、子ども同士の人間関係に配慮しながら指導している。	10. 思いやりのある友だちが多いですか。 11. 友だちが困っていたら、助けていますか。 12. 友だちの意見や考えをよく聞いていますか。 13. 相手の気持ちを考えて行動することができますか。	とても多い／多い／あまり多くない／多くない よくできている／できている／あまりできていない／できていない よく聞いている／聞いている／あまり聞いていない／聞いていない よくできる／できる／あまりできない／できない
ガイドライン	研修（資質向上の取組）	授業研究の継続的实施など、授業改善の取組み	授業研究を継続的に実施し、授業改善に取り組む。	12. 私は、研修部の教員研修計画に基づき、授業研究や公開授業を実施している。	—	—	
		授業研究会、交流授業を継続的に実施し、各教諭の授業力を向上させる。	13. 私は、授業研究や公開授業を通して、自身の授業力の向上に努めている。	—	—	—	

2013年度 学校評価アンケート集計結果
(初等部・教員)



2013年度 学校評価アンケート集計結果
(初等部・保護者)



2013年度 学校評価アンケート集計結果
(初等部・児童)

